

二次元3Dち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

黄金竜を従えた王国 外伝

餓狼の目覚め

竹内けん

表紙イラスト：せんばた楼

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『餓狼の目覚め～黄金竜を従えた王国外伝～』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリーム文庫『ハーレムダイナスト 新・黄金竜を従えた王国 上巻』『ハーレムダイナスト 新・黄金竜を従えた王国 下巻』（キルタイムコミュニケーション刊）とともに読みいただきますと、より楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



黄金竜を従えた王国 外伝

餓狼の目覚め

竹内けん

表紙／せんぱた楼

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

ロレント

ドモスの王太子。のちのドモス国王。まだ■さの残る少年。

ドミニク

ロレントに仕える侍女。知的ですましているお姉さま。巨乳。

「今晚はこれを食わせろ」

大陸最北の荒野。空気さえ凍りつくような寒空の下、二十騎ばかりが疾走してきた。先頭をきつて城門を駆け抜けたのは、いまだ■年期を抜けきらない少年である。しかし、その馬を操るすべは堂にいり、少しも危なげがない。

紅顔の美少年と呼んで差し障りのない目鼻だちなのだが、表情に陰がある。

まだまだ海のものとも山のものともわからない年齢であるはずなのに、年不相応に鋭い眼光には、他者にはない力が感じられた。

そのため、「あれは只者ではない。将来、大物になるぞ」と好感を持つ者と、「あれは危険だ。将来、暴君になるぞ」と嫌悪感を持つ者との、二極化する。

少年の名はロレントという。ドモス王国の王太子である。

「キ、キヤアアアアアアアアア—— ツツツ！」

ドモス王国の首都フェンリル。その王城では、いつせいに黄色い悲鳴があがった。

王子の帰還を出迎えた城勤めの侍女は、いきなり鼻先に鳥獣の死骸を差し出されたのである。

他国からは蛮族と蔑まれ、荒っぽい気風のドモス王国だが、城で勤める侍女。それも王太子の傍にあがる侍女となれば、ドモス家臣団の中でも良家の子女に限られる。いわば彼女たちは深窓の令嬢たちなのだ。

それがいきなり動物の死骸など見せられたら、肝を潰してしまふのは仕方がない。

野生の大鳥を誇らしげに差し出した少年が、馬上でむすつとした顔をして、女たちを睨みつけていると、彼女たちの中から一人の若い女性が進みでた。

「まあ、大きい。殿下、どうぞわたくしめにも持たせてくださいませ」

十代の半ばほどの少女だが、整いすぎた顔には、年相応の愛嬌はない。栗色の髪を櫛跡の残るほどにきつちりとまとめ、鈍い銀色の宮廷服を隙なく着こなした、いかにも切れ者然とした自己演出をしている。

しかし、主君に向ける笑みは優しかった。

「ドミニクか、いいぞ」

破顔したロレントは、自慢の獲物を手渡した。

「……んっ、重たいですね」

主君の手の獲物を恭しく受け取ったドミニクは、その場にいる侍女たちの中で最年少だったのだが、恐れ気もなく動物の死骸をしげしげと眺めた。

王太子付きの侍女は、侍女の中でも選り抜かれた存在であり、みな家柄がよく、容姿端麗の上、仕事もテキパキこなす。

ドミニクもまた、そんな例に漏れない。

父親はドモス王国の敏腕な官吏であるが、もともとは中原から流れてきた才人であるら

しい。そんな父親の影響から、彼女もまた学問を身に付けていると聞く。

ただ、才女にありがちなことに、きつい性格と学をひけらかす癖があるらしく、「かわいげがない」と同僚や先輩の評判はあまり芳しくないようだ。

その上、気難しい若殿に対して、甘いお姉様として振る舞い、上手く取り入っていると、同僚たちには鼻持ちならないようだ。

もつとも、主君に媚びるのは臣下として当然の行為であり、それだけ目端が利き有能だということである。

「脂も乗っていて、まるで大空の主のようすわね」

「おまえもそう思うか？」

少年らしい笑みを浮かべたロレントが身を乗り出すと、ドミニクは優しく頷いた。

「はい。若さまがお仕留めになられたのですか？」

「そうだ」

こんなことで得意になっていると思われるのがイヤなのか、笑顔を引つ込めた少年は、無表情というよりも、ぶつきらぼうに応じた。

しかし、小鼻が膨らんでおり、少年が得意であることは親しい者には充分に察することができる。

王子の側近の中でも、兄貴分として知られるクブダイが口を開いた。

「それはロレントさまがはじめて仕留めた獲物でござるぞ」

「まあ……」

事情を察した侍女たちは、強張った頬に無理やり笑みを浮かべ追従を言おうとするが、上手く言葉が出ないらしい。

そんな中、ドミニクだけが平然として応じている。

「それは腕によりをかけて料理しないといけませんわね」

切れ者の女は、少年が好むであろう、優しいお姉さんとしての役割をきっちりと演じてみせる。

「熱々のスープに入れるのと甘辛いタレをつれた焼き鳥にいたすのと、どちらがお好みですか？」

「……両方」

無愛想に応じた少年は、少し赤面して顔を背けた。

思春期の少年らしく、綺麗なお姉さんの笑顔を間近にして、条件反射的に照れてしまったのだ。

それと馬上から見下ろすと、彼女の胸の谷間が見えてしまう。

この女、瘦身のわりに胸が大きいのだ。その上、姿勢が良かったためか、制服の胸元を内側から圧迫しており、胸元が破れてしまわないか、と余計な心配をしたくなる。

「了解しました。そのように調理するように料理長に申しつけておきますね」

「ああ、頼む」

女の胸が気になるのだが、そこばかり見るのは気恥ずかしく感じたロレントは、わざとしかめつ面をし、面白くもなさそうにあたりを睥睨してから、馬から下りた。

「さ、殿下。外は寒かったですよ。風呂の用意ができておりますよ」

「ああ」

ドミニクは、一番年下のくせに、その場を仕切ってしまったている。

気が利いて有能ゆえの所業なのだが、他の侍女たちからみれば、年下のくせに鼻持ちならない女ということになるだろう。

城内に入ったロレントは、大勢の侍女たちに防寒服を脱がされたあと、風呂に向かう。しかし、歩き出そうとしたところで不意に立ち止まった。

「なにか？」

ドミニクは不思議そうに首を傾げた。

ロレントの目が、ドミニクの胸に吸い寄せられる。鳥の肉はおいしそうだったが、ドミニクの胸の肉もおいしそうだった。

「ドミニク ああ鳥……」

「はい？」

「おまえにも相伴を許す」

「まあ、ありがとうございます」

感動に頭を下げるドミニクを残して、ロレントが今度こそ背を向けて歩き出す。

冬の冷気に冷えた身体を、暖かい湯船に沈めると、クブダイもともに入ってきた。

王太子である。風呂場といえど一人にはなれない。特に風呂場というのは、武器を持参してないだけに無防備である。必ず護衛が付く。

国王の長子であるロレントには生まれたときから、多くの側近がいた。

いわゆる帝王学を授けるのは守役であるステファン老の仕事だが、少し年上のクブダイは、色々と悪い遊戯などを教えてくれる兄貴分である。

そのクブダイがなにげなく口を開いた。

「ドミニクは胆力のある女ですな」

「そうだな。城の女の中には度胸がある」

表情を隠してぶつきらぼうに応じる主君に、クブダイは悪戯っぽい笑みを浮かべて促してきた。

「若は、本日、狩猟ではじめて獲物を仕留めました。ついでに女も仕留めてみたらいかがです？」

「……女を仕留める？」

意味がわからず、不審げな顔をする主君に、側近の騎士は畳みかける。

「ええ、殿下も女の身体に興味があるでしょう」

もちろんある。最近、女の柔らかそうな身体を、なぜか気になって目で追ってしまう。ロレントはまだ女の裸というものを見たことがない。あの服の内側はどうも、男のそれとはだいぶ違うらしい。ぜひ、生で見たい。ついでにいかにも柔らかそうな身体に触ってみたいと思う。

そんな漠然とした願望を懐いているのだが、そんな自分を認めるのが、気恥ずかしい。

「ドミニクあたりなにかがですか？」

「……ドミニクを仕留める？」

どのような思惑があるにせよ、ドミニクは献身的に仕えてくれている侍女である。お気に入りへの侍女といつていい。殺すなどもつての他である。しかし、クブダイの言い回しから、どうも別の意味があるらしいと察して、慎重に応じた。

「そうそう、殿下もお目が高い。あの女、美人の上にいるいい乳していますよねえ。一見、気位が高そうですが、殿下を見る目、あれは絶対に惚れていますよ」

クブダイは軽い調子で、主君をそそのかしてきた。

「ベッドに引きずりこんでしまったらどうです？」

「……ひ、引きずりこんでどうするのだ？」

かみ殺しきれないドミニクの悲鳴に続いて、白い内腿を赤い鮮血が滴り落ちる。これにはロレントも驚いた。思わずスポツと女穴から指を引き抜く。

股間の支えがなくなると、ドミニクの腰はヘナヘナと碎けて、床に横座りとなった。いかな気丈な女も、破瓜の痛みのまえには体力の限界だったのだろう。

そんな女をまえに、ロレントは血塗られた手を翳してシゲシゲと眺めていた。

「ごめん。怪我をさせるつもりはなかったんだ……」

呆然としている主君に、内股を真つ赤に染めた侍女が口を開く。

「どうやらわたくし、たつたいま破瓜いたしましたようでございます。その血がわたくしの殿下に対する絶対の忠誠の証と思し召しくくださいませ」

これにはロレントも鼻白んだ。いままで遊び気分でドミニクを弄んでいた熱がいつきに冷めた。

ロレントは彼女の肉体を弄ぶことを楽しんでいたが、肉体を傷つけるつもりはなかったのだ。罪悪感が胸に突き、どうしていいかわからなくなったロレントは布団に入り、ドミニクに背を向けた。

「おまえの忠義はわかったから、もういい。服を着ろ。下がれ。早く医者のところにいけ」
ロレントの命令に、ドミニクは冷笑を返す。

「殿下は思いのほか意気地がございませんのね」



「俺に意気地がない!」

聞き捨てならないセリフに血相を変えた王太子は身を起こし、振り返った。実に子供らしい反応に、床に横座りをしている侍女は嫣然と笑う。

「はい。女子が欲しいならば力尽くでお奪いなさい。国が欲しいならば力尽くで奪えばいいのです」

少年は自らが劣情を催していることを悟られるのがイヤそうに演じていたが、ここまでしておいて女体に興味がないなどと気づかないほうがどうかしている。

「……わかった」

ドミニクの挑発に、ロレントの自制心は氷解した。牝を狩る牡としての本能のままに、少年は腰を抜かしている女の手を引くとベッドに引きずりこんだ。

そして、仰向けに押し倒すと、さきほどまで必死に我慢していた願望を実行に移す。

すなわち、ドミニクの豊かな量の乳房を両手で握り、思いつき揉みしだく。

「ああつ、あん、アアーっ!」

女の悲鳴などお構いなし。ロレントは夢中になって乳肉を揉みほぐし、そして、牡丹の花のような乳首に吸いついた。

「ああ、殿下、わたくしの愛しいご主君。そうです。それでいいのです」
ドミニクもまた狂乱のていで、ロレントの頭を抱き、頭髪をかき回した。

思う存分に、巨乳の感触を楽しんだロレントは顔を上げると、ドミニクの手が少年の寝巻きのズボンを降ろした。

ビヨンツと跳ね上がるように男根が姿を現す。

「す、ごい……」

まるで最上級の宝石をまえにしたかのようにドミニクの顔は陶然としていた。

主君の身の回りの世話をしてきた侍女である。着替えの手伝いや、風呂の手伝いをしたときに、その逸物を何度か拝見したことがあった。

それだけではない。朝の着替えを手伝いつつ、朝立ちしているさまを生で拝見したこともある。

しかし、それとは違うのだ。ロレントがいま勃起しているのは、自分の身体に欲情しているのからなのだ。

ドミニクは女の幸せを感じていた。

ロレントが勃起していることは、自分の裸体をさらしているときからわかっていた。

寝巻きのズボンを突き破りそうなほどにテントを張っているだけではなく、その先端が濡れていた。先走りの汁まで溢れていたのだ。

そして、ついに外界に現した男根。

年相応で決して巨根というわけではないだろう。しかし、その迫力は凄まじかった。

凄まじい勢いで隆起し、反り返っているだけではない。もはや射精してしまっているのか、と疑いたくなるほどに、先走りの液でドロドロである。

陶酔と溜め息をつく女とは裏腹に、少年は凶悪に叫んだ。

「いま入れてやる。おまえのアナポコにおちんちん入れてやるからなっ！」

ロレントは、この賢しげ面した女に身の程を教えてやろうと、たったいま指で処女膜をぶち破った肉穴に、逸物を叩き込もうとする。

とはいえ、はじめてのことだ。あまりにも元気のよすぎる男根の制御が上手くいかない。ビヨンビヨンと跳ね回るものだから、なかなか狙い通りの穴に嵌まってくれない。

「くっ」

悔しげに奥歯を噛み締める少年を、お姉様は優しく励ます。

「お焦りにならないで。落ち着いてください」

「うるさい」

邪険に応じたロレントだが、ようやく膣口に龟头が嵌まった。

「よし」

会心の笑みを浮かべたロレントは、そのまま腰を叩き込んだ。

生肉を引き千切るような不思議な感触を味わいながら、ズブズブと男根は埋まっていた。

「はあああああ……!!」

あまりの気持ちよさにロレントは後悔した。

生暖かく湿った柔肉が男根に絡みついてくる。

まるで殺したての動物の内臓にでも入れてしまったかのようななんともいえない不快感だ。しかし、直後に逸物の先端から幹を通り、肉袋、尾骨、背筋から脳髓へとゾクゾクするような快感が電流のように駆け上がった。

(くうくうき、気持ちいい……)

脳裏が痺れた。真つ白に焼ききれる。

女肉がキュツキュツと締めてくるたびに、逸物が女の体内で消化されているのではないか、という恐怖を感じた。

「ああっ?! 感じるロレントさまの魂の形を……」

震えるロレントの背中を、感極まったドミニクは両手で抱き締め、両脚で腰を絡めた。

ロレントは思いきり腰を使い、ガンガンと女体を犯そうと欲したのだが、身体がいうことを利かない。

まるで体力を女体に吸い取られているかのようなようだった。女の腕の中で震えていることしかできない。

「は、はあああああああ……ドミニク、ドミニク、ドミニク……」

快感が飽和状態になった少年は、女の巨大な乳房の中に顔を埋め、幼子のように泣きじやくつているかのようだった。

柔らかくて暖かい、濡れていてキュンキュンと締めてくる膣洞の中で、少年の元気な逸物はのたうち回っている。

「はあ、ロレントさま、わたくしの愛しいロレントさま。どうかわたしの中にあなたさまの証を刻み込みください。わたくしをあなたのモノにしてくださいませ……あああああああ!!!」

感極まる嬌声を張り上げられながら、ドミニクは下から腰を突き上げてきた。

「くあ……ああ……ああ……ああ……ああ……ああ……あ……」

逸物が女肉の中で絞りあげながら、前後させる気持ちよさ。その気持ちよさは異常だった。ザラザラとした肉壁に擦られる快感、それは一度味わったらやめられない。

女の楽しみ方を教えられた少年は、自ら腰を動かし始めた。恐る恐る、しかし、だんだんと素早く力強く激しく、夢中になって突貫する。

若く鍛えられたしなやかな狼が、柔らかい牝鹿でも食らうかのように、巨大な乳房を揉みしだき、かぶりつきつつ、腰を凄まじい勢いで乱舞させた。

「ひい、ああ、はあ、あああゝゝゝ、ああああゝゝゝ」

女の身のことなどまったく考慮していない。ただい少年が、自らの感情の赴くまま女

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>